

／ 発見！ ／

おごおり遺産

No.43

日子神社発句額

日子神社境内に掲げられていた発句額が市指定有形文化財になりました。一体どのようなものなのでしょうか。

左義長の煙りの果や野々霞

下イワタ

狐嵐

約210年前の文化13年(1816)2月、日子神社へ、2枚の発句額が奉納されました。右の句は、その発句額に記されていた句の一つです。

「日子神社発句額」

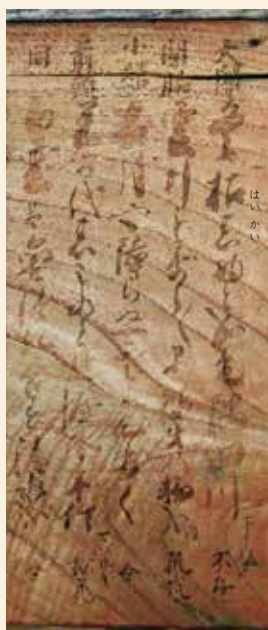
と名付けられた2枚の額は、日子神社の拝殿内西壁上部に横並びに掲げられています。縦41センチ、横156センチ、厚



拝殿に発句額が掲げられている日子神社(山隈)

さ1.5センチほどの板にそれぞれ50句が記され、各句の下には俳号(句を詠んだ人のペンネーム)のほか、その人の居住地が記されています。句を詠んだ人の中に氏名や年齢などが分かる人はいませんが、地名を見ると、「松崎」・「下高場」(現・筑前町)・「東小田」(現・筑前町)など、日子神社を中心として半径5キロメートル程度に住む人々であったことが分かります。

この発句額の特徴は、相撲番付のように「大関」「関脇」「小結」「前頭」と順位がつけられている点で、このような発句額は珍しいと評価されています(現在のように相撲番付の最上位として「横綱」が使用されるようになったのは明治23年からで、発句額が奉納された文化13年には、大関が最高位でした)。



庶民の間に俳諧の文化が広まったのは江戸時代中期以降で、全国で松尾芭蕉(江戸時代前期に活躍した「俳聖」とも称された俳人)を供養するための句碑建立なども行われました。小郡市内でも、小郡下町に芭蕉没後100年にあたる寛政5年(1793)の「蝶の飛ぶばかり野中の

日陰かな」という胡蝶塚が、松崎天満稻荷神社には年号不明の「木の本に汁も膾も桜かな」という句碑が建てられ、明治時代に入っても小郡日吉神社の拝殿に発句額の献納が見られます。このように、小郡でも俳諧文化が浸透し、神社仏閣に俳句を奉献したり、石碑を建立したりする活動が盛んに行われたことが分かっていますが、日子神社発句額は、その先駆けとなるものです。

日子神社発句額には、近世九州俳壇史に残るような著名な人物は見られません。しかし、この発句額が奉納された江戸時代後期、京都や江戸から離れ、宗匠(文芸・技艺に熟達して人に教える立場の人)がいた記録もないこの地域に、これほど多く句を詠む人がおり、俳諧を楽しもうとする気風があったことを今に伝える、とても貴重な歴史資料です。

当時の俳諧文化などを詳しく知りたい人は、広報おごおり12月号でお知らせした『日子神社発句額』市有形文化財指定記念講演会(1月10日開催)にも、ぜひご参加ください。



日子神社発句額(1枚目)

問文化財課

☎75・7555